

舞踏の極北、コンテンポラリー・ダンスの極南? それぞれの身体が向かう方向性を見た。

栗太郎・古舞族アルタイ「東方犬養録」
2006年10月15日 音や金時
maguna-tech「ロマンチック新聞」
2006年10月12日～17日 神楽坂 die pratze



古舞族アルタイ 撮影/山口みこ

ダンスの合間に手の平だけを印象的な表情と間をもって差し出した。舞台の奥に座ったもう一人の女性ダンサーの後ろに博美が隠れるように重なり、あたかも折れてしまったかの首だけを横から見せたり、二人で向き合う時の…、そして開脚して座る他のダンサーの足元に向かって這って行く時の野性とエロスの混在した時間など。

そして、もう一つ「いい」のが、武智のパレエまでを視野に入れつつ、やはり舞踏や東洋的なものも含めて多様な身体の実験している贅沢なボディによる時に爆発的で、そして微妙な間も持つ身体性による「ダンスそのもの」から解き放たれる透き通ったようなエナジーだ。私がこれまでよかったダンス公演は、何も舞踏を経由したものでばかりではないのだが、肉体=精神の解体によって、舞踏ワールドが宝庫であることに間違いはない。

今回は、博美と同様のフェティッシュな衣装を着けた林洋子と平松歌奈子、武智の他に、伊藤大介が出演。音楽は、武智・主宰の「tsuchigumo」によるノイズ系のものが鳴り響く中での公演だった

(原田広美/舞踊評論)

栗太郎は、緩やかに儚くなだれ落ちる。こういう舞踏は、最近では本当に見られなくなった。舞台奥の左右に、天井から2枚の大きな白い和紙が、床までたれている。ただし上手の一枚はクリーム色で、柔らかな触感の布のよう。やがて2枚の紙の前に、高田知佳と徳阿礼が現われ、各々が、背後の和紙の質感を映すように、徳は、前述した栗太郎の踊りの、究極の繊細な部分を体全体で醸し出すような踊りを、高田は縦横ストレートな質感の(首が大変に左右に振れたのが印象的)踊りを展開。栗太郎が模型の小型飛行機と遊び戯れた踊りの場面も、懐かしさ一杯で忘れ難い。

また、しっとり落ち着いた井上憲司のシタールと犬狼のキーボード、および踊りを誘い出すかの重森三景による三味線も好演。

「古舞族…」というグループ名なのだから、次のような言い方も許していただけるだろうが、土方の踊りに特に敬意を抱いた「北方舞踏派」を経由して、ここに忘れられた、「突っ立った死体」の対岸を支えていた儂い「命」の踊りが残されていた、という感動があった

*

さて、ここから「maguna-tech」による「ロマンチック新聞」の話に入ろう。「maguna-tech」は、博美と武智圭佑による共同ダンス・ユニット。2003年「貧血アンドロイド」から作品を積み重ねてきた。

どこが「いいか」と言うと、まず博美のアヴァンギャルドなセンスと、それによる振り付け。アピールのある印象的なダンスの表情に、さらにモードの異なる「舞踏的」な「間」が微妙に加味されて、見る者の脳裏に印象的な記憶を残す。たとえば、

maguna-tech



栗太郎 撮影/稲垣卓史

そこでは、よく上方異

の全盛期70

年代の踊りの形容に使われる「空気の絵巻物が繰り広げられるような」軽やかな、あるいは打ちひしかれた切なさや、立ちのぼった。それは特に踊りの山場において「繊細さのうちに観る者の心に忍び寄る」という意味であり、肉体と精神に〜あるいは身体に〜、幾重にも張り巡らされた微細な神経が中枢でキャッチされ、神経もろとも肉体と精神が微妙な時差を伴って震えていた、というような、実に正当なシュール・リアスティックな身体の手法をもって、観る者の無意識的な領域にタッチしてきた、という情景であったと思う。

特に、肩がなだれ、また時に、肩から体全体が、

バラエティに富んだ即興表現の祭典。 即興の「可能性」に観客は何を見ようとしているのか。

REVIEW

「即興 PLANET」
2006年10月22日 渋谷「青い部屋」

ボイスパフォーマー富士栄秀也氏とダンサー紙田昇氏企画によるイベント『即興 PLANET』が開催された。出演者はダンサー、ミュージシャン、パフォーマー、役者と幅広く、それぞれ7組のチームを組み、即興のパフォーマンスを披露した。7組は小学生の子供とミュージシャンが組んだものや、完全に即興ではなく演出的に脚色されたもの、ボイスパフォーマー同士のセッションや、役者とダンサーとミュージシャンの絡みなど、様々な形態があり、それぞれに楽しめた。スタイリッシュで、表現というより「芸」になってしまうもの、共演者にあわせ自分の範疇以外のパフォーマンスを試みようとするもの、逆にまったく共演者に構わず自分

のパフォーマンスを行うもの…等々。それにしてもこのようなイベントを観ると、即興の魅力とは一体何なのか考えさせられる。意図した効果のためにあらかじめ構成して作られた作品と違い、即興表現の面白さとはやはり予想を超えた効果が出てくるという点であろう。しかし予想を超えれば「誰の」予想を超えたことなのだろうか。それは多分にパフォーマー、演奏者の予想を超えることだと認識されているのではないかと。つまりパフォーマンスする側が、例えば自分と違ったジャンルの人間とセッション出来たり、競演することで自分の範疇を超えたパフォーマンスが出来た時に、そのパフォーマー自身が即興表現の醍醐味を感じられるということではないか。しかしそれはあくまで「やる側」の喜びであって、「観る側」は一体即興表現に期待しているのだろうかという疑問がわく。例えば初めて観る人にとってはそれが即興なのか打ち合わせをして作られたものかということとは区別がつかないのであって、即興かそうでないかというのはやる側の問題でしかないのではないか。さらに即興は実際にうまくいくとは限らないとなると、観る側はそこに何を見ればいいのか

だろうか。観る側は即興かそうでないかを気にすること無く、鑑賞すればいいという答え方があるだろう。だが、即興でしか味わえないものが観る側にもある、ということも否定できない。観る側も、やる側が自分のパフォーマンスの領域を超えたと感じる時がまれにあり、その緊張感が共有できる時があるのだ。それが感じられるのは、パフォーマー同士の競演がうまくかみ合っている時よりも、むしろ多少の違和感があるときだと思う。今回の7組は、ある程度うまくいくことが想定できる人選と、組み合わせだったと思うが、その中でも多少なりとも、演者同士の食い違いや、違和感があり、そこが面白いといえれば面白いのだった。それは何か新しいものが生まれる「可能性」に立ち会う面白さだと言っても良いだろう。即興とは観る側も、そしてやる側も、想定内の表現からぬけだし、「可能性」にかける行為だと再確認した。

(小笠原幸介)



カットイン Vol.55 2006年11月号 発行/タニエイトダンス チェア・オブ・ザ・ウィット 編集/井上二郎+川宮麻希 090-5391-0588 kausuke@gsawara@mail.goon.jp DTP/ORANGE, OGA

失われたものを探す姉妹の物語に、日本と韓国の姿が重なる。私達はお互いに出会うことができるだろうか。

福華殿+釜山演劇製作所ドンニョック
「Myth Busan-Tokyo MIX」10月20日～22日 新宿タイニエアリス



本公演は韓国釜山にあるドンニョックと、日本の榴花殿との合同プロジェクトである。テーマは両国の神話であり、また一組の姉妹の物語でもある。口をきけない姉と、涙の流せない妹。この姉妹が、韓国神話と日本神話を繋ぐ存在であった。各場面を断片的に展開しながらストーリー、モチーフを暗喩的に表す手法は、夢の中にあるような感覚を与えた。現代の両国で活動する若者たちが何を発信したのか、物語を追いながら考えてみたい。

最初のシーン。3人の女が座っている。白い仮面を被った女は両側の女の髪を梳いた後、倒れてしまう。その時、小柄な女が叫んだ。「お母さん」。長身の女は目を大きく開き母の体を無言でさすり、小柄の女は笑い声を発する自分に戸惑う。一組の姉妹は仲たがいを起こし、別々の方向に退場した。ここから個別の物語がはじまる。

姉が進んだ方向とは、母の死を乗り越え新しい人生を歩んでいくことだった。まず、がまの油売りに出会い、宣伝と引き換えに薬を譲り受ける。この薬は、飛ぶ鳥から墜落したウサギの傷を治す際に使用することとなる。そのお礼にウサギは時計を用いて姉を占い、愛する人に出会う運命を予言する。姉と別れた妹は母を蘇らす為、あの世へ行くことを目論み、道化師のようなトッケビと出会っていた。二人は傘を被った男女に花をあげることで、腰の曲がった男

女に出会う。さらには、母の形見である飾と引き換えに帽子ほどの大きさの船を手に入れるのだった。

その頃、姉が運命の青年と幸せに暮らす中、花魁の音が響く。「最後の息子をよこせ」。姉は青年の上着をまとい、身代わりとなって花魁を待つ。花魁の胴体に蠢く手を切り落とし、青年との生活を命がけで守りきる。一方、船を手に入れた妹は、顔を白い布で覆った者が横たわる世界に足を踏み入れていた。門番に掛け合うが、阻まれ奥へ行くことができない。その内に横たわっていた者たちに囲まれ、沈んでいく。こうして、最初の試みは失敗してしまう。

花魁の脅威から解放された姉は、赤い糸で青年を縛り食物に貪りついていた。そこへ大きな扇子を手を持った雨女と、傘を持った男が登場する。互いに絡み合い雨女は傘男を受け入れるが、傘男は雨女的首飾りを奪うと消えてしまう。暫くして、首飾りを手にした傘男が戻ってくるが、雨女は逆に傘男に首飾りをかけ退場する。傘男は、気が触れたように笑う姉に問いかける。「幸せですか？」。姉は形見の飾を見つめ泣き出す。「行かなければ」。ここから姉は死人を生き返らすという命の水を探しに行くことになる。その時あの世へ行きそびれた妹に、トッケビは子供を生む代わりに命の水を手に入れる方法を教えていた。妹は水の音を頼りに男に出会い、赤い布の中で互いを見詰め合う。

時は流れ、子供を失った妹の手に小瓶が握られている。そこへ姉の為に命の水を探す青年が現れる。妹との争いの末、青年は命を落とす。青年の死を知った姉はあの世へ向かうが、青年の顔を見た為青年に追いかけられる。逆上する青年に、ウサギから貰った桃を投げつける。命からがら逃げ切った姉は、

呆然と佇んだ後に倒れてしまう。妹が手に入れた命の水も、見ず知らずの死体に飲ませてしまう。その時、姉が起き上がり妹と見詰め合う。そして、互いに言い合う。「私は別の道を行かなければなりません。」「私たちは、またいつか出会うでしょう。」「その時、私たちは幸せですか?」「きっと幸せです。」「きっと」。二人が笑顔で客席を向いたところで、舞台は終了した。

本公演はストーリーの随所に、両国の神話とキャラクターを織り込んでいた。パンフレットによれば、韓国神話は「バリデギ」「トッケビ」「ホンドンジ」、日本神話は「因幡の白兔」「八咫の大蛇」「天の岩戸」「黄泉の国」が取り上げられた様だ。実際に舞台を観ていると、神話の要素は姉妹の物語として完全に昇華していた。その中で興味を引いたのは物々交換により話が展開する点であり、現代の資本主義との対比を思わせた。また、姉が母の死を忘却する傍らで妹が母の蘇生に命をかけ、最後には二人とも命の水を探すという顛末は、大東亜戦争をめぐる日本と韓国の立場と重なるようにも思う。

そして結末の姉妹の掛け合いは、二つの劇団が公演を通して辿り着いた結論のように思われる。異なる国籍を持つ者による安易なスローガンのようであるが、ここには個人レベルでの交流が齎した感情がある。パンフレットによると、「韓国」と「日本」との関わりは一世紀の伽耶にまで遡るといふ。その時、日本は弥生時代を迎えていた。それから約2000年もの月日を経た本公演では、神話から相似のコードを見つけ出すことに注意が注がれた。とはいえ、舞台ではドンニョックの役者の華麗な身のこなし、台詞のテンポに日本には無い美しさを感じた。共同制作というレベルでの模索の蓄積により、全く新しい相互理解が得られるのではないかと、そういった希望を持った。

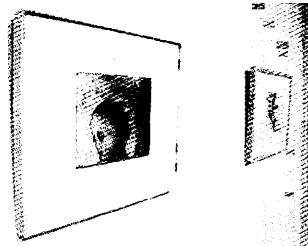
(覆園亜希子)



INTOWN

奇妙な後味

●10月某日、横浜馬車道にあるギャラリー太田町に行く。街の小さな画廊、みたいなスペースにあふれるのは、優しい雰囲気漂う北浦亮子の銅版画である。北浦の作品をずっと見続けているが、毎回ちょっとずつ違う。違う、といっても表現されている内容の話ではなく、作品から見える世界観がいつも異なるのだと思う。銅版画のもつ、紙に染み入るインクのあじ。黒いインクと白い紙の間にあるひっそりとした空気。そして息をするのも惜しいくらい、北浦の作品に取り上げられる人や動物やモノは静かな微笑みをたたえている。今回半年ぶりに見



北浦亮子展

て想像するしかないが、明らかに誰かを愛し、そして誰かを愛している。愛情という感情をしたたかに、それでいてひしひしと感じる。以前別のギャラリーリストが、20代の女性の1年は毎年違うものよね、と言っていたが、現在の北浦の日々に、愛が充実しているのだから勝手に推測した。(藤田千彩)

●いわゆるコンテンポラリーダンスにたまに見られる「笑い」の要素がどうも苦手だ。「コンテンポラリー=真面目」という風に見られるのが嫌なのか、センスの良さを見せつけるためかどうか知らないが、楽しめないことが多い。しかし初期型の公演「まだらなまだらインゲン豆が旅立つよ」の「笑い」は楽しめた。テーマは「愛すべきバカ」。しかし単に客を笑わせようとしている訳ではなく、シリアスに見せないための軽い味付けのユーモ



初期型

アでもない。そういった作為的な意図やもったいぶった演出からスッパリと切れているような、直接的な笑いなのだ。また、お笑いだと思って見ていると、まったく「オチ」のない身体の動きだけのシーンがあったり、まったく意味不明な全裸の胴上げがあったり…先の読めないシーン展開は何かから恐ろしいブラックな感覚も感じた。「バカ」というものを利用して何かを表現するというのではなく、舞台上には「バカそのもの」が表現されていたように思う。その方向性は明確で、楽しめた。しかしただ楽しいだけでなく、奇妙な後味も残る不思議な公演だったとも言える。写真は白塗り姿で一心不乱に踊るダンサーに、周りが「…あれ、重森さんじゃない?」のシーン。10月25日麻布die prätzeにて。(小笠原幸介)

アリスフェス'06、注目のラインナップを紹介!

アジア各都市をネットワークで繋ぐ新宿の小劇場
TINY ALICE より最新ニュース

劇団アランサムセ (from東京)
「バンテージ」
12月14日(木)～17日(日)



12月14日(木) 19:30～
12月15日(金) 19:30～
12月16日(土) 14:00～ 19:30～
12月17日(日) 14:00～

☆作・演出 = 金元培 ☆出演 = 金隆一 鄭誠根
金愛玲 安英玉 金正浩 他

☆問い合わせ = Tel&Fax:080-3428-1139
E-mail:p_sondo0222@yahoo.co.jp
→劇団アランサムセの一つの転機となった作品を、8年振りに新しいキャスト、新しい演出で再演。とある高校のボクシング部員-キムキムこと木村と、マネージャーの小百合そしてキムキムが探し求める伝説の「ボクサー」、只(オ)。そこに何故か「右翼マニア」の桜田や、空手の達人朝高生らに加わり…彼らの立つリングは果たして何処であり、彼らの拳はいったい何を「殴る」べきなのか。

アランサムセならではのテイストで描く、屈折青春ストーリー!



もしもしガシャーン
(from埼玉)「生まれ晒し」
12月22日(金)～24日(日)



12月22日(金) 20:00～
12月23日(土) 15:00～ 20:00
12月24日(日) 13:00～

☆作・演出 = 奈尾真
☆出演 = たかはしみちこ 奈尾真
☆問い合わせ = Tel&Fax:080-5564-9102
E-mail:mittoko-mosi.mosi@ezweb.ne.jp

Web:http://mosi2.at.infoseek.co.jp
→団体名のとおり、勢いと無茶でやってきたヘンテコな劇団である。毎回、代表の奈尾真のヘンテコなタイトルとヘンテコな世界観、ヘンテコな設定で「フツーの人間ドラマ」を上演している。1999年12月宮城県仙台市にて旗揚げ。以降代表の奈尾真のオリジナル作品を中心に仙台で活動し、2004年9月、埼玉のテント劇団である「劇団どくんご」の旅公演に参加するため活動を休止する。約4ヶ月の全国旅公演終了後拠点を埼玉に移し活動を再開。今回がもしもし復活第一回日の公演

ALICE FESTIVAL 2006



である。



アリスフェスティバル好評開催中!!
タイニイアリスwebサイト <http://www.tinyalice.net>
もご覧ください。

横浜に新たなアートプラットフォーム 『急な坂スタジオ』が完成。

国際的な舞台芸術のフェスティバル「東京国際芸術祭」の開催をはじめ、さまざまなアートに関するプロジェクトを立ち上げているNPO法人アートネットワークジャパンは、横浜においてNPO法人STスポット横浜との共同事業体として、また新しい事業を立ち上げた。アートプラットフォーム「急な坂スタジオ」がそれである。横浜野毛にあった結婚式場「老松会館」を転用して作られたこの施設は、舞台芸術の創造のために使うことの出来るスタジオを完備し、またレジデンスアーティストを迎えて様々なアートプロジェクトを発信する拠点になるという。そのオープニング・パーティと内覧会が去る10月に行われた。今回はその様子をレポートする。

野毛山の坂を登ってスタジオに着き、建物に入ると中はまさに結婚式会場そのものだ。そして大小様々の部屋が稽古場として使うことが出来るようになっている。5つのスタジオはさすがに結婚式場を転用して作られただけあって、広さも十分にあり、使い勝手がよさそうだ。しかも新しくきれいなのに驚く。トイレも新しいし、シャワー室まで完備されている。また稽古場だけでなく、本読みや打ち合わせのために使える和室も用意されている。そして圧巻が一番広いホールだ。当日はこの急な坂スタジオのレジデントアーティストでもある矢内原美邦率いるNibrollがリハーサルを行っていたが、とにかく広いのだ。練習スタジオというより、ちょっとした発表会場にも使えそうな広さで、音響装置も完備されているし、大人数のダンスカン

パニーなどの練習にはもってこいの場所だと言えるだろう。

廃校を利用して立ち上げた「にしすがも創造舎」、今年から管理運営をしている大倉山記念館など、アートネットワークジャパンの稽古場およびアートセンター設備の立ち上げの背景には、劇団、カンパニーが利用する稽古場不足という問題意識があると思われる。確かに今の現状では、必ずしも十分な場と時間をかけて作品を作るということは望めないだろう。苦勞をかさねて、やがて自分たちが練習できる稽古場を作ってしまう劇団もあるが、そういった劇団はほんの少数であり、実際は公民館等で時間に追われながら何とか稽古を重ねるのが実状だ。

また、この急な坂スタジオでは、長期の利用が可能のため、(最長2ヶ月)、場所だけでなく十分に時間をかけて作品を作ることも可能。場所が見つかったとしても、定期的にその場所をとるとするのが難しいという問題はこれまであまり考えられてこなかったのではないかと。長期利用可というこのシステムは、演芸やダンスの現場をしっかりと配慮した画期的なものだと思う。つまりこの急な坂スタジオは公民館のような、ただ「何にでも使える場所」ではなく本格的な舞台芸術製作のためのスタジオなのだ。

また急な坂スタジオのもう一つの特徴はレジデントアーティストを迎え、アートプロジェクトを立ち上げて行くという点である。現在のレジデントアーティストは岡田利規(チェルフィッチュ)、中野成樹(中野成樹+フランケンズ)、矢内原美邦(Nibroll)の3人。これからこの場所を使って彼らのカンパニーも創造をし、同時に急な坂スタジオでのプロジェクトにも、企画段

芸術文化を支援、発信するNPO
アートネットワーク・ジャパンより
MONTHLY LETTER Vol.34

階から参画していくという。一体どんな刺激的なプロジェクトが発信されるのか楽しみである。

内覧会のあとにはレジデントアーティストの3人によるトークショーも行われた。その中でチェルフィッチュの岡田利規氏が製作の際の時間と場所の問題について言っていた言葉が興味深かった。「ここで(急な坂スタジオ)稽古していたら、そのうちチェルフィッチュの舞台にも大掛かりなセットが登場することになるかもしれない」ということを冗談めかして言っていたのだが、確かに広い場所を与えられればいい作品が生まれるということには必ずしもならないかもしれない。むしろチェルフィッチュの舞台が、小道具やセットを排除し、役者の特異な身体性を浮かび上がらせるように、製作において足かせになるはずの制限が、逆にある種の独特な表現を生み出すということもあるだろう。作品というものが製作される環境と親密に結びついているのだということを考えさせられる。この制作現場から新しい表現が生まれるのを期待したい。(CUT IN)

急な坂スタジオは、横浜市との協働のもと、NPO法人アートネットワーク・ジャパンとNPO法人STスポット横浜の共同事業体が管理・運営を行なう、公設民営の文化施設です。



所在地…〒220-0032
横浜市西区老松町26-1 旧老松会館
アクセス…京浜急行日ノ出町駅から徒歩5分
JR、市営地下鉄線 桜木町駅から徒歩10分
お問合せ先…tel 045-250-5388
fax 045-261-1300 <http://kyunasaka.jp>
toiawase@kyunasaka.jp
開館時間…10:00～22:00
休館日:第3月曜日、年末年始(12/29～1/3)

左…スタジオ外観 中…スタジオ1 右…ホール



幻想の中の真実。人形と人間の競演舞台。

新しい演劇を発信する神楽坂と麻布の小劇場
DIE PRATZE より最新ニュース

■ACT project Raccoon Dog

11/23(木)~11/26(日) [SUNRISE HELL]
@麻布ディプラツ 問=03-3420-9490 (ACT project Raccoon Dog) ☆作・演出=POCHI田中 ☆出演=白川空司 桃乃すもも 駱駝油イル 真我佐助 山口晴志郎 沙藍 他

POCHI田中(以下「P」)…ウチも数える事10回目の公演になるんやけど、一番変わった所って何やろ?
白川空司(以下「白」)…旗揚げ当初と比べて?もちろん、作品のレベルも上がってると思うし、お客さんも増えて来てるんですけど、やっぱり劇団員全員が芸名になった事ですかねえ。
P…最初は芸名はアタクだけで他は皆、本名やったからな。
白…僕は旗揚げの時に付けてもらって…
P…「シラカワカラシ」っていうのをな

白…まあ、回文ってあんまり気付けて貰えないんですけどね、劇団員の名前も皆POCHIさんが付けるって事になったんですけど、蓋開けたら、たけし軍団みたいじゃないですか!
P…何で?皆の希望聞いたかな?「桃乃すもも」も「私、ピンクが好き!」って言ったからや!
白…そらそうですけど、「駱駝油イル」なんて、ただの「駱駝の痛の説明」でしょ?

P…顔が駱駝に似てるやないかい!
白…「真我佐助」って…

P…アイツは本番中、絡む相手にアドリブでちょっかい出すねん。何でそんなすんねん?って聞いたら、「魔が指すんです」言うたんや。
白…そのまじじゃないですか!まともなん、「山口晴志郎」だけですやん。
P…あの人はここに来る前からあの芸名やったからな。でも、「附れ」の字使ってる割に本人あんまり晴々しくないや?

白…オッサンですからねえ…

P…作品的には?

白…「ロマティックの逆襲」は思い出深いですね。ウチの作品じやなきや僕はアイドル役出来ないじゃないですか?

P…ダンス大変やったなあ

白…オリジナルで曲まで作って貰ってねえ…

P…歌い踊ってる最中に足撃ったりすんねん?

白…はい、何回かホントに撃りました

たよ 後は13通りのエンディング用意されてたやつはドキドキしましたよなえ?

P…「GO-I-NN-KYO」な

白…バラエティー的なゲームを何人かがやって、優勝した人によってエンディングが違ったんですね?

P…本番で通し稽古でも勝った事の無い奴が勝つてもうて…

白…皆、暗転中に慌てて楽屋戻って脚本チェックして…

P…今回の見所は?

白…地獄の話ですよ。死んだら行くの決まってるからこんなに詳しいの? P…勉強したんや!!

白…今回に限った話じゃないですけど、僕も年間、相当な数の芝居観に行きますけど、ウチ程笑いで一途なコも少ないですからねえ。 P…面白いのは間違いない?

白…そうですね、台本読んだ感じでは…あと、泣かしますしね。アレ?泣かしませんの?ベタな言い方ですけど、涙あり笑いありの舞台でしょ?じゃあ、エンディング変更しましよ!

P…どう変更すんねん?

白…主役が雪の中、犬と一緒にある教会に行くんですよ。とある絵の前で息絶えて犬諸共死んでしまうんです。そして、天使たちが… P…バクリやないかい!!もうええわ!!

■LUNE PERFORM WITH DOLL

12/18(月)受付 19:00 / 開演 19:30
問合せ/03-3235-7990(火除く12:30~17:30)
@神楽坂 DIE PRATZE ベラドナの本 主催
チケット:予約¥3000 当日¥3500(前売¥2500 購入はHPにて) 公演・アートシーンの展開・イベント開催情報を掲載するファンサイト
http://www.lunefanclub.com
http://www.glocities.jp/kanagawaluneclub/

★人形遣いLUNE インタビュー

Q…人形遣いLUNEさんの舞台芸術を何度か拝見したことがあります。LUNEさんは黒子ではなく人形と共演なさっている印象がありましたか…

LUNE…人形と人間が逆転して自分が人形に操られて動いている。人形に託しているのです。ただし、現実的には有機物と無機物との絶対的融合することはないところをあえて挑戦しています。

Q…LUNEさんのデパートリーの中に面だけ、布だけを使った演出があり、等身大の人形を遣うより存在を感じ、そのものらしく見えてくるところが魅力的です。

LUNE…そうですね、単独パフォーマンスでは得意としている

演出でも人形を使うとなかなか思うようにいかず勉強が必要だと精進しております。そのくらい人形は難しいのです。

Q…人形、あるいはLUNEパフォーマンスは何を表現しているのですか?

LUNE…自分自身、もう一人の自分。

Q…自分を表す意図は?

LUNE…人間の中には二人の人が住んでいると思います。それが善し悪しではなく存在している。

現実には無理でも舞台という幻想空間では素直にニュアンスで表現できるのです

Q…LUNEさんの舞台は頭で考えるというよりは心で感じる時間です。感情に染み込んでくる…何だか分からないけれど、伝わってくるものに感動してしまつて知らず知らず涙が溢れてきてしまったこともありました。日頃胸の奥底に眠っている懐かしい記憶とリンクするような不思議な感覚です。間に漂う一匹の虫、虫自体の姿は見えないけれどもついたり消えたりする光を目で追うことでも存在を知る。「幻想」の中に「真実」を見ている気がします。そして舞台には独特の時空が流れています

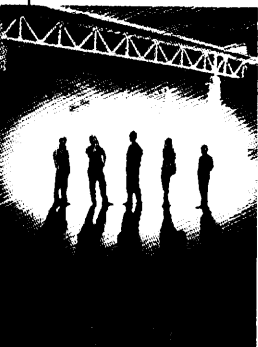
LUNE時間といましようか、嵐が来て冷たく濡れたかと思っていると、さあっと引いて太陽が顔を出しほっとする。つまり温度があるんです。体感すること、そして感情の波。これは舞台を何度か続けて観てだんだんとLUNE時間に親しんできて分かる楽しみ方だと思います。シーズンを変えて観て見ると面白いと思います。LUNE PERFORMANCEは年2回公演ですね?とも観たいという声があると聞きますが。

LUNE…夏は友達を死を鎮魂、冬は一年間を振り返って思うことをテーマとして20年間舞台を作り続けています。数を打てば良いわけではなく、一つ一つに魂を込めているので今のところ年2回の公演が限界なんです。

Q…LUNEさんの舞台は心に直接響いてくるので見る側は公演後ととて疲れてよく眠れます(笑)。

LUNE…演じているわけではなく精神で対話しているのが終演と同時に私も無くなってしまいます。言い換えれば舞台上で行われたことは紛れもない真実と言えるのではないかと思っています。

Q…大変貴重なお話でした。今後の活躍も楽しみにしています。ありがとうございました。



TINY ALICE / NPO ARC

新宿区新宿2-13-6 光聖ビルB1 tel&fax 03-3354-7307
http://www.tinyalice.net tokyo@tinyalice.ne.jp

12/1(金)~12/3(日) ■演劇集団 劇団べんべん
「ディクファイブ 晩秋」 問=E-MAIL penpen2@tkc.att.ne.jp
☆脚本=山本弘 ☆出演=波多良介 山波圭 田淵愛智 奥菜篤 丹勇輝 時尾浩之 杉浦雄一 本田真山本弘 ◎毎年恒例、師走に合わせた二丁目御馴染みべんべんの登場。今回は現代劇でお楽しみください。

12/4(月)~12/5(火) ■Dance-Medium 定期公演Vol.3
「THE INVISIBLE FOREST-見えない森(リメイク版)」
問=tel:090-3904-1032(長岡) ☆出演=長岡ゆり 正朔 宇田川正治 小玉陽子 亀田欣昌 ◎長岡ゆりと正朔(元・白桃房)、先鋭的な二人のダンサーが組んだダンスユニットの第三回定期公演。

12/8(金)~12/10(日) ■劇団Ugly duckling
ALICE FESTIVAL2006参加 「スパイクレコード」
問=Tel&Fax: 06-6933-3455 ☆作=樋口美友喜 ☆演出=池田祐佳理 ☆出演=出口弥生 中村隆一郎 吉川真子のあざみ 村上俊子 太田浩司(未来探偵社) 藤岡悠美子(南船北馬一団) 中野聡 樋口美友喜 ◎1995年旗揚げ、つねに樋口と池田の作・演出コンビでオリジナル作品を上演して、関西で注目の劇団の5度目の東京公演。アリスフェスは2003年以来二度目の参加だ。

12/14(木)~12/17(日) ■劇団アラサンムセ
ALICE FESTIVAL2006参加 「バンテージ」 詳細はp3参照
12/22(金)~12/24(日) ■ももしもガシャーン
ALICE FESTIVAL2006参加 「生まれ産し」 詳細はp3参照
12/26(火)~12/30(土) ■Riverbed Theater (台北)+劇団
戯変 金満里ソロ公演 ALICE FESTIVAL2006参加

■Riverbed Theater「雲になった男-The Man who became a Cloud」 ☆作・演出=Craig Quintero

■劇団戯変 金満里ソロ公演「月下咆哮」 ☆監修=大野慶人 ☆出演=金満里 問=タイニイアリス 03-3354-7307

◎今年ラストを飾る舞台は、米国人演出家クレイグが主宰する台湾の劇団と、舞踏家大野一雄に衝撃を受けた金満里。全く異なる

る二つの方法が、国境を越えて激突!競い合う。

神楽坂 die pratze

〒162-0812 新宿区西五軒町2-12 T&F 03-3235-7990

■LUNE PERFORMANCE 2006

●12/4(月) 20:00 百鬼とどろろ公演 「夢のうつつ、現つのゆめ~人と人形による短編集~」 問=0265-86-4270(百鬼とどろろ) 090-5587-0550(脚本)

E-mail dondoro@da2.so-net.ne.jp ☆作・演出=岡木芳一 ●12/5(火) 19:30
問=03-3235-7990 (神楽坂ディプラツ 火曜除く12:30~17:30) HP=http://www.dokubana.jp ☆作・演出=江口信利 主催=ベラドナの本 ◎06期後の専花公演!今回は9/17に行われたサディスティックサーカスのリメイクバージョン特出しです。

12/8(金)~10(日) ■越前屋ラオオ
【女と男】 問=090-3238-2534 ☆作・演出=越前屋ラオオ 店☆演出=森山沙英子 後藤裕菜 他 ◎奇妙な関係 狂った人生 楽しき運命

12/12(金)&13(土) ■genre:Gray(ツチパデロコ)
【青い髪】 問=03-3363-3687 ☆作・演出=辻 桃江 ☆演出=辻 桃江/辻 良江 他 ◎オブジェクトシアター・テパドロアの姉妹ユニットが躍る、ヒト・モノ・オト・ヒカリの60min. 青髪公儀期の裏のお話を、テーブルやコート掛けが語ります。

12/15(金)~12/17(日) ■遊幻サーカス
[CROWN] 問=080-1097-6820
☆作・演出=あらひひろこ ☆出演=横山真 金子恵 澤唯 小菅結子 菅沼美和子 他 ◎「非言語としてのコト」をテーマに、独自のエンターテインメント空間を創り出す遊幻サーカスの第4回公演。身体性とユーモアを駆使した現代童話をお見せいたします。

麻布 die pratze

〒106-0044 港区麻布1-26-6 2F T&F 03-5545-1385

11/20(月) ■井上節子バレエ・シアター
問=070-5591-3125 ☆構成・演出=振付=井上節子 ☆出演

=田中英幸 三沢恵子 大越陽 武政裕美 森島珠紀 井上節子 他

11/23(木)~11/26(日) ■ACT project Raccoon Dog [SUNRISE HELL]

問=03-3420-9490 (ACT project Raccoon Dog) ☆作・演出=POCHI田中 ☆出演=白川空司 桃乃すもも 駱駝油イル 真我佐助 山口晴志郎 沙藍 他 ◎アクトプロジェクト・ラクーン・ドッグ第10回公演。人間と地獄の番人達との心の戦い。死して気が付く優しさ・愛しさ・せつなさ・酸さ。シチュエーションコメディ。

12/1(金)~12/3(日) ■Produce Unit "Gala"(プロデュースユニット ガーラ)【キーキョー・パレレル】
問=090-9804-4468(ワタナベ) ☆作=浅沼絵理子 ☆演出=濱邊文絵 ☆音楽=小山ツトム 山内優 他 ☆出演=千葉洋紀 林暲(劇団AUN) 木澤智子 TAIRA宮川英子 二川めぐみ 太田智子 他 ◎「それは、夜空に輝く東京タワーのしたで起こった 小さなけれど素敵な奇跡。ダンスと音楽のコラボにより描く、4つの記憶が織り成す、クリスマス・ストーリー。」

12/5(火) ■ダンスの犬 ALL IS FULL
[SO WHAT -ふたををす-] 問=047-447-0073(ダンスの犬 ALL IS FULL) ☆作・演出=深谷正子 ☆出演=岡田隆明 縫部憲治 成田優美子 斉藤直子 玉内菓子 ◎自分の体、自分の顔、その存在のあやうさが、ひずみが、日々モコモコと動く。人と人の関係性や個に向かう矢印も変なカタマリのエネルギ一からまる今の私の体。

12/8(金)~12/10(日) ■演劇ユニットFavorite Banana Indians [Unforgettable] 問=090-2632-4661(制作)
☆作・演出=徳吹肇 ☆出演=たまえ 他 ◎変幻自在・神出鬼没の演劇ユニットFBが躍る、「記憶」をめぐるサスペンス。他人の記憶を操れる女の復讐劇に巻き込まれる人々の物語。

12/19(金)&20(土) ■劇団Jokers+
[~exciting dance performance~ GYAAAH!]

問=090-6482-3885(制作) ☆演出=原口かな ☆出演=原口かな 宮本沙美 上歩祐己 石川祐司 堀江慎也 前野千尋 内田藍 ◎若さあふれるダンスパフォーマンス第1弾! 最年少15歳から24歳までの、若いながらも技術、精神力共に卓越したダンサー達。一杯飲みながらの観劇は如何?

schedule for November 2006

schedule for November 2006